

# 発題 I 東西宗教交流学会小史

八木 誠一

## I 創立から現在までの経過

一九八〇年六月一五日～二七日、ハワイ大学において、同大学主催により、*East-West Religions in Encounter* という国際学会が開催された。これは仏教とキリスト教の比較、交流、対話を中心とする会合で、北米、日本、東南アジア、オーストラリア、スリランカ、ヨーロッパなどから約八〇名の研究者、宗教者が集まり、合計一〇〇近い講演、シンポジウム、研究発表があった。この際、定期的に学会を開催する方針が定まり、恒常的組織として *East-West Religions Project* を立ち上げ、事務局をハワイ大学に置き、三年に一回大会を開催することになった。この学会はやがて北米に本部を

おく *Society for Buddhist-Christian Studies* へと発展した。

さて（本会を立ち上げた一人、阿部正雄はすでに在米中だったので）日本からは土居真俊、本多正昭、八木誠一らが出席していたが、会期中のある日、土居が本多と八木を昼食に招き、日本にもこのような学会を設立しようと提案、本多と八木はこれに賛成した。こうして上記三人が中心となり、日本に *East-West Religions Project* の支部会をつくる話が具体化し、一九八二年二月二二日、京都の NCC 宗教研究所において発起人会が開催され、支部会設立と第一回学会大会の開催について打ち合わせがなされた。出席者は以下の八名であった（ABC 順）。モリス・オーガスチン、坂東性純、ヤン・ヴァン・ブラフト、土居真俊、藤吉

慈海、本多正昭、石田慶和、西村恵信、八木誠一。この会を東西宗教交流学会と名付けようと提案したのは土居真俊である。

ついで同年三月一〇日付で「東西宗教交流学会日本支会発会趣意書」が上記の準備会で推薦された約三〇名の会員候補者におくられ、二四名の入会承諾を得た。第一回学術大会については、上記発起人の間で、わが国での仏教とキリスト教の対話の成果を確認するところから始めることが合意され、まず滝沢克己氏を講演者として招き、同氏の講演とそれに関する討議を内容とすることが決められた。

学会事務局はブラフト氏のご好意により、南山大学宗教文化研究所に置かれることになり、同研究所の職員が印刷、連絡等の実務を担当ないし助けてくれることになったので、学会運営が具体的に可能となった。なお本会の特徴として、講演ないし研究発表と討議に通常の学会を遥かに上回る時間が割り当てられたこと、入会審査を厳しくして会員数を限定したこと、が挙げられる。これはむろん学会の質を高めるためであった。

一九八二年七月二六～二八日、京都の関西セミナーハウスにおいて、東西宗教交流学会第一回の学術大会および総会が開催された。七月二六日の会員総会において、八木が作成した原案に基づいて学会規約が承認され、学会の名称も東西宗教交流学会と確定した。名簿も作成された。規約には本会が *East-West Religions Project* の日本支部会 (*Japan Chapter*) であること、本会の会員は上記学会の会員として登録されることも承認され、明記された。ただし日本支部会にかかわる上記の規定は一九八六年に廃止され、改定規約第二条により、本学会の英語名を *Japan Society for Buddhist-Christian Studies* とすること、北米の *Society for Buddhist-Christian Studies* と協力関係を保つことが合意された。それ以来本学会は北米での上記学会大会に討議者を派遣するようになった(大会記録参照)。ついで規約に基づき、以下のように会長および幹事が選出された。会長、土居真俊。幹事、ヤン・ヴァン・ブラフト、本多正昭、八木誠一(以上キリスト教側)、石田慶和、板東性純(以上仏教側)。なお一九八六年以降は

幹事を理事に改名)。学術大会および総会は年一回(七月)原則として京都で開催される方針が定められた。第一回会合の出席者は以下の通りである。滝沢克己、モーリス・オーガスチン、坂東性純、リノ・ベリーニ、土居真俊、藤吉慈海、本多正昭、石田慶和、武藤一雄、西村恵信、小野寺功、武田龍精、ノット・R・テレ、八木誠一、八木洋一、浅井永(オブザーバー)、Schille Fritsch-Oppermann(オブザーバー)。

一九八三年以降、書記は二〇〇一年まで八木誠一。会計ははじめブラフト、次にハイジックが担当した。二〇〇一年以降は現在まで渡辺学が書記を担当。渡辺は二〇〇二年からあらたに発行されることとなった会誌『東西宗教研究』の編集と実務を兼ねることとなり、過重労働歴然。よって、もし本会が継続されるなら、組織として、会長のほかに書記、会計、会誌編集担当の役員がそれぞれ一名任命されるのが望ましいと思う。一九八八年十二月七日、土居真俊会長が死去。それに伴い第八回総会(一九八九)において補選がなされ、ヤン・ヴァン・ブラフト氏が会長代行に選ばれた。同

氏は第九回総会(一九九〇年)において改めて会長に選挙された(一九九七年)。

なお第三代会長は上田閑照(一九九七年〜二〇〇一年)、第四代会長は八木誠一(二〇〇一年〜二〇〇三年)、第五代会長は河波昌(二〇〇三年〜)である。

第一回大会記録は『大乘禅』誌(中央仏教社刊、編集人秋月龍珉)七一―号、一九八三年二月号に掲載された。大会報告の同誌掲載は第一九回大会報告(同誌九一―五号、二〇〇一年四・五月号)まで続き、同誌編集人秋月の死去(一九九九年)後、二〇〇一年に同誌の都合により中止となった。しかし二〇〇二年に会誌『東西宗教研究』(発行者、東西宗教交流学会。発行者、南山宗教文化研究所)が創刊され、第二〇回以降の大会報告は同誌に掲載されている。本稿には第一回〜第二四回大会の簡単な記録が付されているので参考にされたい。

## II 討議された主要テーマ

さて、この二十五年間に本学会は何をしてきたかを

大会記録にもとづいてまとめてみたい。なお以下の分類は、事柄の複雑さからして、一応のものであり、事項も必ずしも網羅的ではない。

一、仏教とキリスト教の対話において重要な役を果たした思想家の立場をめぐって

思想家名	テーマ		
滝沢克己	神と人との接触の問題	第一回大会	一九八二
久松真一	発表者 滝沢克己	第一回大会	一九八二
同 右	発表者 星野元豊	第二回大会	一九八三
土居真俊	対話の神学	第六回大会	一九八七
西田幾多郎	西田哲学との対話	第十一回大会	一九九二
西谷啓治	西谷啓治研究	第十四回大会	一九九五
阿部正雄	阿部正雄氏の立場をめぐって	第十六回大会	一九九七
小野寺功	小野寺功氏の聖霊神学をめぐって	第十七回大会	一九九八
C・G・ユング	発表者 渡辺学、J. ハイジック	第十八回大会	一九九九
上田閑照	上田閑照氏の思想	第二十三回大会	二〇〇四

二、仏教とキリスト教、宗教間対話

テーマ	発表者		
イエスと禪	八木誠一	第三回大会	一九八四
キリスト教と仏教の接点	西谷啓治	第四回大会	一九八五
仏教とキリスト教（可逆・不可逆）	本多正昭	第七回大会	一九八八
東西霊性交渉をめぐって	奥村一郎	第七回大会	一九八八
仏教からキリスト教へ	奥村一郎	第十九回大会	二〇〇〇
仏教とキリスト教——行論への展開	八木誠一	第十九回大会	二〇〇〇
マリアとマザー	小林圓照	第十九回大会	二〇〇〇
仏教・キリスト教から見た場所	松岡由香子	第二十三回大会	二〇〇四
タワーにおける宗教間対話	橋本裕明	第二十三回大会	二〇〇四

三、仏教論

テーマ	発表者		
大乘仏教	玉城康四郎	第五回大会	一九八六
原始仏教	玉城康四郎	第五回大会	一九八六
大乘仏教	玉城康四郎	第五回大会	一九八六

四、宗教間対話における重要テーマ

テーマ	発表者		
コミュニケーション	八木洋一	第九回大会	一九九〇
象徴	J・ハイジック	第九回大会	一九九〇
場所の論理と宗教批判	田中裕	第九回大会	一九九〇
場所論序説	八木誠一	第二十二回大会	二〇〇三
場所論の記号化	八木誠一	第二十三回大会	二〇〇四
言葉	花岡永子	第九回大会	一九九〇
空の思想と浄土	J・ブラフト	第十回大会	一九九一
空と輪廻	梶山雄一	第十三回大会	一九九四
神	八木誠一	第十三回大会	一九九四
空と死	西村恵信	第十三回大会	一九九四

禪	上田閑照	第八回大会	一九八九
浄土教	寺川俊昭	第八回大会	一九八九
同右	坂東性純	第十回大会	一九九一
唯識	横山紘一	第十二回大会	一九九三
同右	竹村牧男	第十二回大会	一九九三

死と空と神	J・ブラフト	第十三回大会	一九九四
靈性	花岡永子	第十九回大会	二〇〇〇
自然ということ	上田閑照	第二十回大会	二〇〇一
自然ということ	田中裕	第二十回大会	二〇〇一
形相、空、自然	河波昌	第二十回大会	二〇〇一
身体観	頼富本宏	第二十一回大会	二〇〇二
西田哲学における身体	小坂国継	第二十一回大会	二〇〇二
「一」の座としての身体	八木誠一	第二十一回大会	二〇〇二
浄土教における身体	河波昌	第二十二回大会	二〇〇三
身体より場へ	本多正昭	第二十二回大会	二〇〇三
経験、言葉、自覚、自然、いのち	吉田喜久子	第二十三回大会	二〇〇四
絶対無における人格性と非人格性	花岡永子	第二十四回大会	二〇〇五
同右	八木誠一	第二十四回大会	二〇〇五
同右	竹村牧男	第二十四回大会	二〇〇五
同右	田中裕	第二十四回大会	二〇〇五

### III 回顧と展望（本学会の目的）

本学会の発足のときに、まず最近の日本の思想家が仏教とキリスト教の比較、対話などの領域でいかなる仕事をしたかを確かめよう、という方針が立てられた。よって本稿第二節一に示される思想家の立場が取り上げられた。しかし思想家に関する二回や三回の講演と討議では、ただか思想の輪郭が浮かび上がるだけにすぎず、立ち入った検討は本会メンバー各人の仕事だといわざるを得ない。なおこの過程で、本学会の方針につきさまざまな提案があった。たとえばモーリス・オーガスチンは会の事業として実践を導入することを提案したが、これは学会の事業としては否決された（一九八八・七・二六改正の学会規約内規参照）、共通の地盤が——西田哲学をひとつのモデルとする——宗教哲学であることが確認された。

さらに本会の事業としては、東西宗教交流の趣旨に基づき、相互の宗教を学びあうことが考えられる。実際、仏教については、本稿第二節三にみられるような概論

がなされた。

この方向の継続を考えていたのはたとえば秋月龍珉だが、本会は「概論的勉強会」というよりは「宗教哲学的研究討議会」であるという考え方から、第十二回大会以後は、仏教概論はなされていない。勉強会なら、キリスト教についても、旧約聖書、新約聖書、イエス、古代教会での教義形成、ギリシャ正教、ローマカトリック、プロテスタント、あるいはパウロ、ヨハネ、アウグスチヌス、トマス・アクイナス、ルター、カルヴァン、さらに近代・現代神学者についての概説があってもよかつたのだが、本会の事業がこの方向へは進まなかつたのはある意味では当然であろう。両教に関する一般的知識は研究者の前提条件である。しかし本会の発展のためには会員のための仏教・キリスト教概論をプログラムに含める親切も必要かもしれない。

しかし本学会ではむしろ、「仏教とキリスト教」にかかわる諸問題が取り上げられ、本稿第二節四にみられるようなテーマについて研究発表と討議がなされた。これは思想家論とともに、本学会の成果とみなされえ

ようが、しかし問題の取り上げ方は必ずしも組織的ではないし重要なものを尽くしてもいい。たとえば宗教の絶対性・排他性、交流と相互了解の可能根拠、絶対者およびその人格性・非人格性、宗教的認識論や現代倫理などは必ずしも中心的な問題となつてはいない（ただし第一回大会での滝沢克己の講演、第二十四回大会での研究発表などを参照）。

個人的なことを含めて私の考えを述べさせていただけば、私は講演や研究発表と討議の場としての本学会からどれだけ益を得たか測り知れない。この学会は私の研究にとつてなくてはならないものであった。しかし私個人のことを別にして学会の在り方を考えると、本学会は、他の諸学会のような個々の問題に関する研究発表会（つまりは若い人の業績作りの場所）というより——むしろそれもあつてよいのだが——仏教とキリスト教の關係に関する共通の方向を打ち出すことを課題として担っているし、それが本学会の特色であろうと考えている。もちろん一定の方向が会員の自由な研究と発表を妨げるようなことがあつてはならな

いし、だからこそ大会のプログラムに「自由研究発表」の時間が設けられているのである。しかしおおかかな方向は打ち出されてもよいのではないか。つまり、もし本学会の共通の地盤が西田を一つのモデルとする宗教哲学であるならば、「場所論」が共通の「場」となりうるのではないか。ひとつの例にすぎないが、私は新約聖書に場所論的神学があることを示し、さらにそれを記号化して、もともと場所論的傾向の強い仏教思想との対応を求めることを提案した。そもそも近代において物理学や天文学などが発展したのは、それらが個々の現象の記述をやめて、数式による表現を採用したのに負うところが大きい。具体的には関数による記述が用いられた。これは量と量の「關係の一定性」を示すもので、さらに関数である以上、代入可能な変数が用いられている。個々の現象の記述から関数表現へと変わったので、多様な現象の統一的記述と演算による現象の予測・検証が可能となったのである。

場所論の場合も、代入可能な変数を用いて諸現実間の「關係の一定性」を示し、さらに命題の変形によつ

て諸命題間の内容的・論理的関係を明らかにすることができ、というのが私の記号化の趣旨である。宗教間対話においては、多様な命題を統一的に叙述する方法の開発が必要である。この際重要なのは、一般の論理学や数学とは違って、厳密な同義性（一意性）の平面が設定されていないことである。宗教には、ある観点からはAであるものが、他の観点からはBである、という言語表現が多い。場所論も例外ではない。それどころか、場所論には作用的、相互内在、相互浸透というような「二の二」（即）が多出するのだ。

それを表現するのが「」記号で、 $a \supset b$ とは、「aであり・かつbであるが、観点を決めればaかbかのどちらかである」という意味である。「 $(a \cdot b) \cdot (a = b)$ 」ただし「即」は $(p \sim d) = (d \sim p) \cdot (p \cdot d) \cdot (d \cdot p)$ と書ける。これにより、たとえば時計の針は表から見れば右回りだが、裏から見れば左回りだ、というような立体的事態の表現ができるわけである。すると作用的、相互内在、相互浸透というような事態が正確に書ける。のみならず、記号による命題式は代入可能な変数を使うことで

多くの事態の統一的表現が可能となるのである。たとえば私は新約聖書における場所論の全体を四行の命題式で書くことができると考えている。この四行の項をしかるべき代入によつて変形すると仏教思想の表現となる。いつか仏教とキリスト教の関係が、「現実にはキリスト教的にも仏教的にも表現できる。しかし観点を決めれば、現実にはキリスト教的かあるいは仏教的かのどちらかである」と言い表せるようになるであろうか。

しかしここで最も困難な問題が現われる。対話の過程で、両方の宗教はなにほどか——あるいは大いに——変らなければならないことが示されてくるのである。つまり問題は理解や解釈ではなく、真理問題だということだ。換言すれば本学会の営みは単に宗教哲学「的」な解釈なのか、真実に宗教哲学なのか、ということである。哲学なら、経験、認識（自覚）、言語（論理）、認識内容にかかわる良心的な自己批判と可能な限りの検証による、新しい知の創造がなされなければならない。その担い手はまずは自由な研究者としての会員個人であり、もし可能ならば学会の一致した見解もある



程度は生まれるだろう。そのためには会員が伝統教学から自由になることが求められるのだが、難しいといったのは此の点である。この方向を強調すれば会の求心性が成り立たず、解散となる可能性もあろう。

本学会が仏教者とキリスト者によるそれぞれの立場の説明や意見の交換の場にとどまるのか、むしろそれにも必要には違いないが、それに基づいて相互理解を進めてゆくか、それとも決心し直して、自己批判・相互批判を媒介として、仏教とキリスト教の共通の根を発見し、掘り起こす共同作業に取り組むのか（私は両教の交叉点には豊かな鉱脈があり、その発掘は現代の思想と宗教にとって重要な貢献になると確信している）、あるいは、もう十分仕事をしたのだから従来の成果以上を求めることを断念して解散するか、そしてもし可能なら、現在までの諸事業を含みつつ、さらに他の方向と仕方を求めて出直すか、それらが現時点で問われているわけである。

## レスポンス

渡邊 学

はじめに

八木氏の発表は、東西宗教交流学会の成立状況からその主要なテーマ、さらに、回顧と展望（本会の目的）についてまとめている。その意味で、本学会の歴史を一望するのにきわめて重要であるといわなければならぬ。

私の本学会に関わるようになったのは一九九五年であり、すでに学会が発足してから一三年の月日が流れていた。

まず、私が抱いている疑問点をいくつか挙げることよって、レスポンスに代えたい。それから、事務局側から見た東西宗教交流学会の歴史を概観して、今後の展望につなげたいと考える。

第一に、東西宗教交流学会の日本語の名称と英語の名称のギャップについてである。日本語の名称は、東西宗教交流学会と言い、東洋宗教と西洋の宗教の交流というきわめて広い意味を持っている。しかしながら、英語名は、Japan Society for Buddhist-Christian Studiesであり（会則第一条参照）、明確に仏教とキリスト教という限定を担っている。

実際、過去の大会を参照すると、「仏教とキリスト教の対話において重要な役割を果たした思想家の立場をめぐって」というカテゴリーに京都学派の哲学者や神学者や仏教学者や宗教者がいるのを別にすれば、その例外と言えるのは、心理学者のC・G・ユング程度であろう。そして、本会の大会は、もっぱら仏教とキリスト教の対話に焦点が合わされてきたと言えるのではなからうか。たとえ、場所、空、象徴、言語のようなテーマを中心とした大会においても、仏教、西田哲学、キリスト教などの視点が中心であったと言わなければならない。

本学会の目的は、第四条にうたわれ、「本会は東西宗

教の学問的対話を推進する者相互の連絡をはかるとともに東西宗教の相互理解の深化発展を期する」と書かれている。ここでも東西宗教というあいまいな表現が使われてはいるが、東西宗教は、基本的に仏教とキリスト教と置き換えることができる（言えよ）。

しかしながら、東西宗教とは仏教とキリスト教であるということが暗黙の前提とされて明文化されなかったのはなぜなのだろうか。そのことをまずお伺いしたい。

第二に、本会で扱われたテーマを概観すると、信に関する議論が見当たらない。宗教哲学というものが信をテーマ化せずに成り立つのかどうかかわらないが、信に対する軽視があつたように思われるがいかがだろうか。つまり、逆に言えば、信と知という区分からすれば、知の側面に偏重していたのではないかと思われる。それは、西田哲学や禅がベースになっていたことと関連があるのだろうか。

第三に、場所的言語を仏教とキリスト教の共通理解のために用いるということに関してであるが、私は懐

疑的にならざるをえない。なぜなら、すでに田中氏他の方々からも指摘されているように、八木氏が用いている記号は、八木氏が八木氏の思想を表現するために特化しているのであり、他の人々がその記号を共有して用いるということを前提としていないように思われるからである。ということは、八木氏の思想を理解するためにその記号を分析することは可能かもしれないが、他の人々がその記号を用いるような時が来るとは考えがたいではなからうか。

### 事務局からみた東西宗教文化交流学会の歴史

次に、東西宗教文化交流学会の裏面史として事務局から見た東西宗教文化交流学会の歴史を扱ってみたい。

私が南山宗教文化研究所に赴任したのは一九八九年である。その時点ですぐに東西宗教文化交流学会に入会手続きをするように当時のプラフト所長からお誘いを受けたのを覚えている。しかしながら、私は入会をためらわざるをえなかった。というのは、入会すれば即座に事務局を担当させられることが目に見えていたから

である。

私は、以前、一九八〇年から一九八三年まで当時会員数が三百名程度であった日本ユングクラブの初代事務局長を務めたことがあったので、その苦労はよくわかっていった。ようやく学位論文を完成して研究所の専任研究所員になったのに事務局業務に追われるというのは、私には決して好ましいこととは思われなかった。

私が実際に東西宗教文化交流学会に参加して会に関わるようになったのは、一九九五年のことであったと記憶している。一九九六年には、Society for Buddhist-Christian Studies の国際大会がシカゴのデ・ポール大学で開催され、私も通訳等を務めるため、在外研究先のハーバード大学世界宗教研究センターからかり出された。これを機会に私も会務に積極的に関わるようになった。

そして、ハイジック前所長が一年半の研究休暇でスペインと南米で過ごすことになり、研究を代表してだれかが南山宗教文化研究所側の責任者になる必要が出たため、私は、二〇〇一年度から書記担当理事として

事務局を包括的に担当するようになった。

このとき、それまで長年報告書を掲載していただいていた『大乘禪』の存続がむずかしくなったこともあり、独立の年報を発行することになった。それが『東西宗教研究』（二〇〇二）である。また、その当時、『大乘禪』誌に二〇万円もの寄付を行ったため、一挙に財政基盤が不安定になったこともあった。

独立の年報をもったことにより、報告書の分量にかなりの自由度が生まれた。それまで発表原稿もドイツカッシーンはかなり要約せざるをえなかったが、全体を載せることが可能になった。しかしながら、全体にわたってドイツカッシーンのテープ起こしをすることは困難を極めた。たとえば、二〇〇五年度のドイツカッシーンでは、英語、ドイツ語、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、漢語などが何の翻訳もなしに自由に駆使されており、これらをテープ起こしするのは、相当な知識の蓄積を持つてしても困難であった。

今回は、従来よりもさらに細心の注意を払って時間をかけてテープ起こしをしたが、これはきわめて手間

のかかる作業であった。また、一々それぞれの用語に注解を加えることも考えられたが、それがテープ起こしの範囲をはるかに越えた作業であり、あえてその作業は行わなかった。このような作業の困難は、今後とも大きな問題となっていくと考えられる。

#### 東西宗教交流学会の事務局と南山宗教文化研究所の活動

当初、東西宗教交流学会事務局は、ヴァン・ブラフト元所長が招致したが、それは、南山大学内の了解を得ないまま行われたものであった。そのため、研究所事務室においても代々事務職員が学内の職務の範囲を越えて、南山宗教文化研究所の職務の一環であること理由として担当させられていたのであった。したがって、事務職員の負担を増大させることになり、その不満も長年高まっていたことも否定できなかった。

とりわけ、一九九九年に南山宗教文化研究所は創立二十五周年を迎え、二十五周年記念シンポジウムとともに日本宗教学会年次大会を招致し、同時に国際シン

ボジウムを開催することになった。このときの事務負担はきわめて大きなものであった。

私は、実質上、日本宗教学会年次大会の事務局長を務め、アルバイトの配置や大会運営だけでなく国際シンポジウムの準備や連絡係をも担当していた。また、大学入試センターの委員も兼務していた。そのため、これらの事務負担は過重なものとなっていた。

また、日本宗教学会年次大会後、私は、同学会国際委員だけでなくアメリカ宗教学会国際委員をも日本を代表して務めることになったため、二〇〇〇年から二〇〇三年にいたるまで、年に二回は会議と年次大会のために渡米し、二〇〇一年には特別トピックフォーラムを主催し、さらに二〇〇三年にはアトランタ大会において「日本の学者と学問」を学界全体で特集し、それをコーディネイトして日本から三十名の研究者を派遣することも行った。

その間、研究所事務職員の負担が増大して、残業が日常的に行われているのをみるにつけ、私自身、東西宗文化交流学会事務局は、可能な限り教員サイドで負担

すべきであるという結論に達した。

そこで、二〇〇一年度以降は、印刷所への取り次ぎなどを除いてほとんど事務職員に負担をかけない形で学会を運営しているのが実情である。同時に、ついに研究所には専任の事務職員が配置されなくなり、本年七月からは専任嘱託の事務職員のみが配置されるようになった。これは、一つの時代が終わったことを象徴的に表している。

さらに、二〇〇五年三月には国際宗教学・宗教史会議世界大会が東京において開催された。本学会も一つのパネルを主催した。私はそのコーディネーターと司会を務めた。それだけでなく、私は同会議の実行委員の一人であり、その他、全体講演のレスポンス、台湾の研究者のパネルのレスポンス、国際宗教学会のパネルでの発表も行ったのであった。

全般的にこれは大成功であった。しかしながら、私はその後、過労が昂じて、自転車で転倒事故を起こし、右手を骨折してしまったのであった。そのため、しばらくはギブスをした手でキーボードを操らなければなら

らず、とても苦勞させられた。

そのときに私が痛切に感じたのは、このまま南山宗教学文化研究所で東西宗教学交流学会の事務局を続けているのは、長い目で見て不可能であるということである。

私自身、これまでのように年間二〜三ヶ月も一つの学会の業務に費やすことはできない。毎年、新年度がはじまると『南山宗教学文化研究所研究報』と『東西宗教学研究』の編集作業が重なり、他に仕事ができない状態になっているのも残念である。特に本年は、六月初旬にロンドン大学東洋アフリカ研究センターに所属している日本宗教学研究センター主催のワークショップで二つの発表を依頼されたため、とりわけ苛酷であった。

私より若い研究所の専任研究所員は、東西宗教学交流学会に興味を持たず、研究所の事業としても認めないという態度を取っている。となれば、私が最後まで続けなければこの学会は存続できないことになる。しかし、それは事実上無理というものである。

かつて一つの学会が一カ所に二五年間も事務局を置いていたことがあっただろうか。おそらく日本宗教学

会は例外の一つであろう。しかし、日本宗教学会の場合には専任職員を雇用している点で本学会とは比較できない。多くの全国学会の場合、一〜三年置きに事務局を移すのが一般的ではないだろうか。

また、かつて大会事務局を設けない学会があっただろうか。東西宗教学交流学会は、長年、京都のパレスサイドホテルで学会を行いながら、大会事務局は置かず、南山宗教学文化研究所の事務局が出張サービスを行ってきたのであった。また、事務局がホテルの部屋の予約まで行っていた。さらに、理事会も京都タワーのロビーなどを利用して行われていた。事務局が名古屋にありながら、あくまで軸足は京都に置かれていたのであった。

また、学会費の使われ方にも疑問があった。事務局がある南山宗教学文化研究所で開催すれば会場費はかからないにもかかわらず、パレスサイドホテルやガーデンホテル京都を利用してきたために、会場費が例年十万円以上もかかっていた。また、大会とは別の時期に二度目の理事会を開催していたため、その交通費だ

けでも年間十数万円もかかっていたのである。そのため、本学会の経済基盤はきわめて不安定なものであったと言わざるをえないだろう。

さまざまな工夫により本学会の財政基盤はもちなおしてきている。その点は評価されてよいであろう。

この数年間に名簿や帳簿の管理などをシステム化してコンピュータ化していったので、従来に比べればはるかに楽になったと思われる。どなたかが事務局を担っていただけるのであれば、引き継ぎに十分な努力を傾注する所存である。

#### おわりに

東西宗教交流学会は、西田哲学をはじめとする京都学派の哲学を媒介にして仏教とキリスト教の対話を推し進めてきたことにおいて、大きな足跡を残してきた。できれば存続させていただきたいと、私自身考えている。

しかしながら、四半世紀にわたって本会の事務局を担ってきた南山宗教文化研究所は、すでに役目を十二

分に果たしたと言わなければならない。また、所員会議において本会事務局を引き受けないことを議決してしまった今、他に事務局を引き受けてくれるところが現れなければ、この一年かけて、『東西宗教研究』六号の編集を最後として解散手続きをしなければならぬだろう。

もし、東西宗教交流学会が仏教とキリスト教の相互性の上に成り立ってきたとするならば、次の二十五年間はできれば仏教の代表者によって事務局が担われることを願ってやまない。なぜなら、相互性のないところに対話は成り立たないからである。

最後に、私が近年、南山宗教文化研究所の活動を通じて経験したことをわかちあいたい。

南山宗教文化研究所では過去数年間にわたり、宗教学の国際的な研究所との交流を図るため、世界各国の研究者との交流を深めた。私は、ボストン大学やハーバード大学などを訪問して調査を行った。そのときにアメリカの東西宗教交流学会 (Society for Buddhist-Christian Studies) で長年重責を担ってきたジョン・バ

ースロング氏（ボストン大学准教授）と話をしてみても強い印象を持ったのは、アメリカでも関心はイスラームとの対話に比重が移ってきているとのことであった。仏教とキリスト教の間にはもはや喫緊の問題は存在しないのである。そのことを象徴的に表しているのは、自らが *Buddhist-Christian* つまり仏教徒即キリスト教徒であると考えている人々が世界的にかなり増えているという事実である。これはある意味で対話の成果であろうが、逆に言えば、対話の終焉を象徴的に表している。なぜなら、もはや深刻に議論すべき問題がないことを示しているからである。

仏教徒とキリスト教徒が宗教戦争を行ったことはなかったし、これからもないであろう。となれば、日米の学会は靈性交流の場となり、また、親睦会としての色彩をもたざるをえないことになる。アメリカの学会は、毎晩、お祈りのセッションが開かれたりしているように、靈性交流の場としての色彩を年々深めるとともに、現代世界への応答としての側面をますます深めていっている。

もし日本の東西宗教交流学会が存続するとすれば、どのような方向性を選ぶべきか、十分に考えなければならぬだろう。

今回の大会を通じて、このことについても議論できれば幸いである。